

| | |
|--------------------|---------------------------------|
| Title | 装飾技法の研究(I)：象牙彫について |
| Author | 辻合, 喜代太郎 |
| Citation | 大阪市立大学家政学部紀要. 4 巻 2 号, p.23-26. |
| Issue Date | 1957-03 |
| ISSN | 0473-4742 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学家政学部 |
| Description | |

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

装飾技法の研究

〔I〕——象牙彫について——

辻合喜代太郎

I

家具、調度品、其の他の工芸品の装飾技法の一としての象牙彫法は古来から東洋（中国、日本）に於ても発展した一技法である。⁽¹⁾この稿では西洋中世から近世に至る作品について其の技法、表現について考察したものである。

先ず遺例から考察すると象牙彫作品の最古且つ傑作の一つは紀元六世紀頃の製作である現在 *Revenna* の *Metropolitan* 教会にある *Maxcminian* の椅子である。⁽²⁾これには凡て象牙の平板で造嵌され人像を主題として彫られた坐席の下方と正面の高処にある五個の *Panel* がそれである。脚と背面には動物や花繻又は人像を彫つた象牙の平板を嵌め、正面には僧正の単身像を飾っている。その表現は何れも鋭利に彫られた *Romanesque* 的様式で頗る美しく作られている。⁽³⁾象牙彫の秀でた作品は古代 *Rome* の二連象牙板 (*Diptychs*) 又は三連象牙板であり、“*Cosulare*” の名称で *Rome* 帝国時代に完成されたものがある。元来、これらの *Consular Diptychs* は木材又は象牙を素材とし、その一方を折りたたまれた平板で蝶番で連結している。その外側の表面には総督像、中央部にその地方の領主の肖像を彫っている。これは携帯用にも珍重されたから ‘*Pugillares*、ともよび常に一地方の有権力又は総督の重要な所持品の一つである。

Rome 帝国の命により基督教が国教として公認されて以来、その *Pigillares* は *Diptych* か *Triptych* の形式として人々は各地方の教会の僧正に贈りその親善と後援者であることを明示する目的にも使用した。⁽⁴⁾それらは一般信者が祈禱するためや尊敬する教会の聖壇上に普通安置されることになっていた。この風習は益々 *Diptych* と *Triptych* の製作を旺んならしめた原因となり、その理由は、聖壇の装飾の目的であると共に内面の平板には通例新しく洗礼を受けた教徒や教会の保護者及び同一の高僧、殉教徒の姓名をも記載した。この使用は後世の素晴らしい描画と基督教会のための *Triptych* の彫刻を施したものを産出せしめる契機を作ったのである。

基督教が *Rome* 人によって迫害されていた期間に、無数の *Triptyches* は *Greek* 工人の手で主に象牙彫として作られた。それには聖徒や神聖な人々の代表者を内面に描写し又彫像として表現した。その多くのものは携帯用又は聖壇用として使用され、人々は秘密裡にその前で祈禱するためである。従って大きさも携帯用に適した大きさとになり個人の室や礼拝堂内にも安置した。これが後世の重要な対象となつている。

11—12世紀に於いて象牙彫は其の用途を異にして *Byzantine* 彫刻と共に同時代の天井や壁画の *Mosaic* とは異つた装飾技法として厳肅な簡潔純正な特性をもって歓迎された。⁽⁵⁾その表現された像は長大であり、その衣服の表現が堅く角張り後世に於て最も角ばつた岩塊の如き形式にまで発展した。

他方、13世紀に於ては仏国では象牙彫は *Rheims Chartres*, *Amiens* の寺院の人像彫刻として最も完

全な形式にまで成長しその極盛期を現出せしめ独創的な一派が抬頭したことも看過し得ない事実である。⁽⁶⁾

本来、象牙彫は小形の精密な表現を其の本来の使命としていたことから中世紀にはその正統的表現ともいべき技法が仏国に於て発展している。その代表作は Rouvre にある「聖女の戴冠式」と題したものである。即ちこの作品には基督像は衣装を粧い Philip 三世即ち St. Louis の息子としての容貌を表わし、聖女の形相は即ち其の女王 Lorrane and Brabant の男爵である Henry 三世の娘として人格化されている。この例は紀元1274年頃のものであり、この時代の仏国象牙彫の最も秀れた作品といえる。色彩と豊かな装飾は中世紀の彫刻にも屢々見られた。而してこの例は極めて造形的効果を示した作品といえる。即ち同様な技法は中世紀の多くの墓碑、画像にも其の技法の経路を発見するのである。⁽⁷⁾

古代の Diptych の二三の例は二面の背景をもち、像は色彩を施し且つ鍍金されている。着色又は鍍金された浮彫は独国、仏国に普通に行われ現在に於ても Rome, Greek 教会の像に見受けられる。一般的に僧の衣装の色調は鮮麗な真紅、紺と白色地に金、銀にて描いた鳶尾花、豊富な地文として梅櫛で埋めている。像の描写は中世紀的特質的な形式を示し之れと同趣のものは15世紀の仏国の写本に見られる。



第1
図

象牙彫の平板や Diptych を観察するに第1図の例は既存の概念では古代の象牙彫として最も秀れたものと考えられる。その構図は少女を侍べらした女性を描きその優雅な髪を垂下した衣装を巧妙に配列して洗練されたものである。彼女は聖壇上に立ち神に供物を捧げようとしているのである。Panel の左右脇を占めている果実や花絵は生き生きとした感情に溢れ特に Greek の特性をもつ境界線でその周囲を囲繞している。この平板に関係した他の半分は仏国の Montier-en-Der の古井底で発見されその大半は破損している。而して作品の残部には聖壇上に立つ女性像を示し燃えさかる烽火を手にした状を表現している。これは何れも線的に鋭く彫られているのがその特性である。この著名な平板は72×5吋大である点から推して大規模な教会又は Childeric 時代の Rome から移つて来たものであろう。多分、聖遺物箱の戸を形成していたものと推定される。今日之等の作品は6—7世紀の Rome のものより早期のものと考えられ、Greek の作家によつて完成されたものと考えたい。

他に London, Lipepool の博物館には多数の Consular, Diptych の遺物がある。紀元250年の比較的初期に属したものから540年頃の後期に属するものもある。Rome の総督は殆んど1000年間継続した。Constantinople の総督は紀元541年の Basilins で、Rome の最後の総督は紀元536年の Paulinus である。之等の中の遺物の著名なものは16×6吋大の象牙の平板である。恐らくこれは最大のものと考えられ、その象牙板には一方の手で地球を支持し他手にて長杖を持つた大天使像が彫られている。その像は Corinth 式の柱で支持された円蓋下の階段に立っている。その表現は莊重なもので技法も又秀でている。(第2図) これらと同時代か又は幾干先行した時代の作品に極めて美しく均齊的に水平分割された意匠のものである。この意匠の形式は多分金属の作品から模写されたものであることを暗示している。

既に述べた如く Triptych は聖壇の卓子上又は背面に使用されたが故にその役目を果たした後は自由に運搬することが可能である。然し後には聖壇に固定した形式となり 'Retables, 又は 'Rere doses,

と化した。それには彫刻や色彩を賦与したりしたのである。

世俗的な芸術と日常生活の目的のためのものとして中世紀に於ては象牙彫は書籍表紙、化粧用櫛、鏡箱、角笛、小刀柄、剣、短刀の把手、小箱、金庫の外面に、又化粧箱、僧正の権標（笏枝）、基督磔像、十字架の如き宗教的儀式用のものにまで応用し、後には牧師の杖の装飾として利用された。然し牧師の象牙の杖はあまり普通的のものではなく例は僅かに13世紀に属したものののみ存している。更に、Mr, Maskell が英国製と断定した古い牧師の杖は其の装飾が交錯した奇怪な弯曲した骨製のもので恰も蛇状を呈しているものである。



第 2 図

14世紀に至って象牙彫は極めて社会一般から要求され、その時代に製作された作品も多く遺されているが一般に其の技法は美麗であり、用途としては狩獵用の角笛がその一つで、之れは黄金にて加飾したものさえある。

透彫法を伴った象牙彫は極めて精巧な美的な表現であり、其の例は大形の平板である。この作品は14世紀頃の垂帳下に人像を描いたものと同一理念の構図をもち整頓された配置の人像は特に注目値する。

次に象牙彫作家として著名な人は古代に於ては全く見出し得ないが中世代以降に至つて明白に知られる。即ち Jean Lebraellier は仏国 Charles V 頃の作家であり、Jehan Nicolle は大英博物館にある象牙彫箱の署名によって確実に知られる人であり、其の技法も正確に人像を表現した作品を制作したものである。Henry de Grés は 1391 年に Héliot は 1392年の日附を附した作品が見られ共に14世紀に活躍した作家である。Henry de Senlis は 1454年の 'Tabletier, 又は平板を主に制作し、Philip Daniel は 1484年 Paris にて活躍した人である。Michelangelo も象牙彫を行ったといわれ Cellini, Donatello, Agostino, Carracci や伊国の芸術界に名をのこした人々でさえ、象牙彫作家として注目されている。就中 17 世紀に於ける著名な作家は Cöpe であり彼はその生地、Flemish に居住したが故に 'Fleamingo, と呼ばれた。其の作品は盆、皿、大盃に浮彫的技法として幼児像を主題として愛好した。Floamingo は16世紀末から17世紀初頭まで Rome に住み多数の作品を発表したが1610年歿した。彼の作品に見られる特性はこの時代の他の作家と同様に画家 Rubens の形式を多分に伝承している。即ち主な趣向として比喩的 theme を取扱つた可成調子の高い Realism 的である。特に皿と盆とは Realism 的に表現された酒神像が特に其の技法の優秀さを物語つているといわれる。更に Jone collection にある大盃の遺作によって Fleamingo の技法の特性がよく理解される。即ち其の構図は大盃の胴部には女神像と半人半山羊神とが互に踊り Silenns と二三人の子供が葡萄実を運んでいる情景を描写したものであり、図中の何れも像は生氣に満ちた強い線描で彫られ莊嚴な印象を与えている。又、Francis von Bossuit は前者に劣らぬ偉大な作家といわれる。Alessandro Algardi は 17世紀の作家を代表する人であり、彼の "St, Leo が Attila に面接するために歩む" といった主題は其の著名な作品として高く評価されている。最近注目をあびた作家として Francion Flamand (1594—1644) は永久に生きてゐる最上の作家と絶讃されたのであり、元來彼は Brussel

に生れ、Rome に趣いて研究を重ね象牙彫にて小形の像を彫ることに傑出した技法を現わし Wand-erjaha 時代にその面目を發揮したのである。その遺例は Louvre にある群像と小供と女性との浮彫像に其の真価が伺える。彼の表現の特性は其の形の輪廓が明白であり其の彫像には丸味をもち生き生きとした感覚を十分に大胆に發揮している。

而して象牙彫は14世紀に秀でた作品を現出し順次15—16世紀に及んで衰退の兆を示したのが僅かに17世紀に再度復活している。この原因は独、仏両国に於ける木彫作家の活動によつて与えられた衝動に基づいていると考えられる。即ち当時は大規模な木製の聖壇又は“Retables”が象牙彫技法に代つて流行し従来象牙彫技法によつた肖像、浮彫は凡て木製になつたことに起因している。更にこれに関連して独国にては彫像に好適した“Speckstein”（凍石）又は“Soapstone”とよばれた工作の容易な暗色を呈した Lithographic stone を素材として彫像を試みている。かの Albert Düller, Lucas Cranach もこの Speckstein を使用して極めて美しい作品を制作したのである。かくて一時衰退した象牙彫は17世紀に於て再度復活し初め多くの作家が民衆の要求によつて制作を初めるに至つた。即ち木彫と同様な大規模な形式を象牙彫の技法によつて制作した。かくて其の作品の優秀さは東洋諸国の彫刻と比較されるに至つたのである。（日本の象牙彫根附け）而してこの驚異的な創作の凡ゆる主題は女性像であり Minaiature Runchback や衣裳のボタンにもさえ使用されるに至つたのである。就中 Leo Pronner は多数の首を主題として傑作を發表している。

後世に至つて象牙彫技法は黄金色に着色されたものが要求され真の象牙彫の美しさを失うに至るもの⁽⁸⁾であるがその主題はあくまで人像がその構図の主要の部分形成していることは古代、中世代の伝統をそのまま継承したものと考えられる。

III

要するに西洋に於ける象牙彫技法は金属彫刻、エマイユ等⁽⁹⁾の技法と共に装飾技法の一として、常に基督教と關係して發展したものであり現在の遺例の大半は之れに属している。其の技法は他の装飾技法と異つて素材として象牙を使用し其の製作にも困難性を伴つたが故に何れも貴重なものとして珍重されていた。其の構図、表現は概して中世紀の造形意識に立脚した所謂「中世芸術の一様式」である偶意的にして然かも写実性に富んだ様式を踏襲していたことも見のがせない事実である。16—17世紀以降に於ては中世期に確立された象牙彫の技法や表現を基盤としてはいるが中世期作品に比して写実的表現傾向が強く發見されていたことは当時の繪画、彫刻に於ける表現傾向と軌を一にしていたと考えられる。

註 (1) 象牙を素材として表現する技法

(2) 世界美術全集第12巻、西洋中世 P76

(3) 像の各部の比例を破つた偶意的な表現様式

(4) 吉川逸治著 中世の美術 P59

(5) Byzantine 時代の工芸の中で最も珍重され作風は変化にとんでいたが表現に深さを欠き、其の主要な製作地は Alexandria, Jersalem, Rome, である。その最極期は AD.10—11世紀とする。

(6) 世界美術全集第12巻、西洋中世 P77

(7) 同上 P80

(8) J. ward : Historic Ornament P149—150

(9) Émail cloisonné と Repoussé 法とが併用された。